**№49　テーマ『新しい時代の理想』**

**講話日2010年11月12日**

**皆さんこんにちは。本当に急になんか朝すごく寒くなってきて、外で仕事をされる方々は大変な時期になってきました。今日は今年の最後のお話ですので、ちょっと希望のあるテーマにしたんですけど、「新しい時代の理想」というテーマでお話をさせていただきます。とにかく、今は世界にも日本にもあまり明確な希望が持てる理想のようなものがなくなってしまったような時代で、何かしら目の前の問題に振り回されて、理想に燃えて生きるという状況ではなくなってきているんですよ。政治的にも、中国の問題やソ連の問題で難問が降り掛かってきております。経済も上向かない。国民の立場からすると、理想や夢が見えにくい状況になってきております。こういう時代の中で我々はどのように生きていったら良いのか。とにかく、今は激動の時代と言われて、どんどんアメリカや欧州が衰退していく。そしてそれに代わって、中国が非常に大きな影響力を持ってのし上がってきている。アジアが全体的に非常に高い経済成長を遂げている。本当に世界の図式、世界の在り様というものが20世紀の時代から比べると、急速に大きな変化を遂げてきたということが目に見えるように分かる状況になってきました。**

**今は激変激動の時代と言われているわけなんですけども、激変激動というのは原理的にふたつの大きな流れがある。ひとつは、西洋の時代が終わって、アジアの時代が始まるということ。世界文明の中心が西洋から東洋へと移行していく、そういう流れの中で西洋・欧米の時代終わって、これからはアジアの時代が始まる。そういう意味では、西洋的価値観が音を立てて崩れていって、そしてこれからアジア的な価値観が指導的な役割を果たすようなことになってくる。そういう意味では、西洋的価値観の崩壊とか西洋的価値観の崩壊と言われる。崩壊現象が今起こってきているわけですよ。我々が学校で習ってきた価値観、何を原理にしているのか、そういう学校で習ってきたいろんな知識や考え方というものの重要性が薄れていく、新しい価値観、新しい考え方で生きていかなければならない。そういう状況になってきておりますので、非常にいろんな知識や情報というものに対して、古いものにいつまでもこだわっていてはならないので、常に新しいものに目を向けていく意識を養っていかなければなりません。**

**もうひとつは、近代は理性の時代と言われていたんですけども、理性の時代である近代から次の新しい時代である感性の時代へと、精神原理が大きく変転しているという状況になってきているわけであります。人間の本質は理性ではない、感性だと言われるようになってきた。近代はずっと人間の本質は理性だと考えられてきましたから、学校でも理性を成長させる教育ばかりがなされてきた。心・感性を成長させるという教科書がないんですよ。これからは理性を中心にした教育ではなくて、理性も大事なんだけど、心を養うまた感じる力、感性を養うということが非常に大事になってきました。感性というのは感じる力で、愛も感じるのも意味も価値も尊敬も感謝・感動も感じるもの。感じるものの中には大事な仕事・人生の原理がたくさん含まれている。感じないと、本当の人間味のある人間的な活動ができない。理性で合理的に物事をやっているようでは、人間の血の通った温かな心は死んでしまうことが分かってきました。そういう意味で近代の理性の時代は、人間性が破壊されて血の通った温かな心が消える、ということに結果的になってきてしまったわけですよ。そういう意味では、仕事上もまた人間関係においても常にこれまでの人間の在り方ではなくて、新しい血の通った温かな心を持って、いろんなことを感じ合って心遣いをして生きることが求められる時代になってきました。**

**皆、理屈ではない。心が欲しいと叫んで、心を満たすものを求めている。そういう時代ですので、合理性一点張り、合理性さえ追求していけばいいという、これまでの計算尽くの合理的な仕事の仕方というより、もっと心温かな心遣いとか心の通い合いとか、そういう心の結びつきが大事になってきて、それが心が欲しいという人間の叫びに対応するものなんですよ。とにかく、いろんな面で激変激動が起こってきて、その中で一般的には変化対応能力が大事だと言われて、変化にどのように対応して、それに遅れないでついていくか。そういうことが大事だと言われるんですけども、変化対応能力というのは、変化が起こってから「どうしようか」と考えるような姿勢になってしまいますので、それではなかなかやはり、辛い苦しいと言うかそういう生き方から脱却できない。問題が起こってからどうしようかと思う、ということは問題の後追いですから、なかなか問題の連鎖から脱却できないということになってしまう。結果として変化対応能力というのは、常に問題から抜け出せない後追いの生き方になってしまう。そういうことにならないためには、変化があったからどうしようかと思うのではなくて、自ら変化をつくり出す。自ら激変激動をつくり出す。自ら動乱を呼び起こすということをしないと、自分自身が変化をつくり出すことをしないと、変化することから生じる問題・悩み・苦しみから脱却できない。**

**その意味では、今日我々に要求されているものは変化対応能力ではない。今我々に求められているものは、時流独創の精神。ときの流れは自分がつくる、というもの。自ら変化をつくり出す。自ら激変激動をつくり出す。自ら動乱を呼び起こすということ。まさにテレビでやっている坂本龍馬の明治維新のように、自分自身が激変激動の先頭に立ち、時代をつくっていく生き方が今も求められているのではないかと思うわけです。今自分のやっている仕事に、歴史をつくるんだという意識が大事で、決められたことを決められたままやっていればいいというものではなくて、今自分のやっている仕事に何かしら新しいやり方、改良改革、創意工夫というものを付け加えて、何かしら自分自身が仕事の上で歴史をつくっている意識で仕事をする。そういう生き方が今大事なんではないかなと思うんです。もっともっと我々は規則に従うより、むしろ新しいやり方、新しい何かというものを創意工夫しながら、より能率の良い、より良い仕事の仕方をどんどん挑戦していく。そういうことが実は会社の本当の活力をつくっていくことになって、より消費者に求められるようなサービスや仕事ができるという状態になっていく。決められたことを決められたままやるということは非常に保守的で変わらないことなので、安定成長の時代だったらそれでいいんですけど、今は激変の時代ですから決められたことを決められたままでやっていくことではなくて、皆変化を求めていますので、何かしら新しさを感じさせることでないと、消費者の要求に応えられない。そういうことから、変化をつくり出すことが非常に大事な今の生き方であり課題。**

**とにかく時代は我々に激しく変われよと言っているんですよ。あるいは激しく変えろよと言っている。そういう時代の要求に応えることができるような生き方をしていくことによって、自分自身も生きがいの生き方になっていくし、また仕事も多くの人に受け入れられるような、感動を与えることができるような仕事になっていくのではないかと思います。とにかく時代の要請に応えるということが非常に大事な、企業人としての課題であります。だから、激変激動の時代というものをどう生きるかということをよく考えてみてもらいたい。変化を恐れてはならない。むしろ、自らが変化をつくり出すという力を養っていかなければならない。仕事をするということは、何かしら新しい変化をつくり出していって、そして自分の今やっている仕事に歴史をつくっていく。そういう意識が非常にこの時代には大事であるということ。今あらゆる面で原理的変革、原理から根底から変えていくというものが求められているんだ。そういう意識でいろんなことに対応していかなければなりません。原理的変革という観点から言うと、人間観そのものが激変の最中にあって、先ほど申し上げたように近代の人間の本質は理性だという人間観から、今は人間の本質は心・感性だ、と言われる人間観の大変革が今進んでいます。なかなか現実は人間観の激変に対応できていなくて、まだまだ学校でも理性を成長させる教育ばかりがなされている。なかなか心を養うとか人間性を成長させるとか、人間の本質は心だということに対応した心を成長させる意識での教育が全くなされていない。そういう心を育てるための教科書がない。そういう時代ですので、時代の要請よりも現実が立ち遅れていることを考えてみないといけません。だけどやはり企業社会というのは、まさに生きた現実の中で仕事をしますので、官僚的な固定化された社会システムというようなものをはるかに超えた、新しい生き方を我々は考えていかなければならないわけです。**

**そういう意味では企業の在り方も、もう既に人間の本質は心だと言われているんですから、企業において一番大事なものは何なのかを把握しなければならない。それは、心の結びつき。心の通い合い・心遣いというものが企業の中で非常に大事な課題になってきた。そういうことをちゃんとできないと、企業・組織というものが人間的な人間味のあるものになっていかない。これまでは経済社会も資本主義経済という経済システムの中で企業がつくられてきたものですから、これまでの会社というのは仕事の結びつきと役職の結びつきだけで動いている、非常に合理的な・能率が追求されるような組織であった。だから人間はそのために非常に苦しめられて、数字とか決めごとで非常に縛られてノイローゼになったり、人間味のあるような働き方ができなくて、時間に追われまた規則に追われ、会社の中でのいろんな流れ作業的な仕事で、仕事に追いまくられるみたいな状態で非常に疲労感が多かった。これからは合理的な組織というのではなくて、一番組織の根底に置かなければならないものが、心の結びつき・心の通い合いであって、それらを会社の根底に据えることによって、企業・組織というのは人間味を持ってくる。その上に仕事の結びつきを置き、その上に役職の結びつきを置いて、そして企業は運営される状態に持っていかなければならない。そういう会社のつくり方においても人間の本質は心なんだから、会社も心をベースにしていないと会社も人間的な職場とはならない。だから皆さん方も規則どうのこうのということも大事なんですが、もっと大事なのはお互いの心遣いだ。お互いの心の通い合いだ。心の結びつきが一番大事だ。心遣いや思いやりというものを持って、組織人がお互いに励まし合い、慰め合いまた注意し合って、お互いに血の通った温かな心を持って接するような、そういう心情を企業活動の土台にしていく気構え、自覚がこれから非常に大事になってきます。そうすると会社で働くことが楽しい、会社の人間付き合いは楽しいということになってきて、そして結果として企業の活動が活発になり、また仕事の能率が上がって、良い業績が上がってくるということに結びついていくのではないかと思います。とにかく、人間の本質は心だということになってきたのだから、企業の在り方も原理的な変革が要求されている。**

**仕事の結びつきも役職の結びつきも有機性を持って働くことになってくるためには、その根底に心の結びつき、心の通い合いがないと企業は有機的な結びつきというものを持って組織として団結していくことになってこない。心の結びつきがあれば仕事の結びつきも役職の結びつきも、それが有機性を持って団結力をつくっていくことになっていくんですよ。心の結びつき・心の通い合いがないと、仕事の結びつきや役職の結びつきはかえって人間を縛る・窮屈にする・支配する・管理するという力となってしまう。これまではそういう状態だったんですよ。そうではなくて、社員同士がお互いに心遣いをしながら、心を通わせながら関わる状態にしていくことによって、仕事の流れもまた役職の結びつきもお互いに思いやりや心遣いを持って、有機的に互いを活かし合うように働いていくことになっていくのではないかと思います。ぜひもっともっと心の結びつき・心の通い合い・心遣いというものを企業人として、これから大事にしていってください。自分自身が組織の中で働きやすい環境をつくることにもなるし、相手にも職場で仕事をするのが楽しいという気持ちにさせてあげることもできますので、とにかく心の通い合い・心の結びつき・心の繋がりをもっともっと意識的に大事にする気持ちを持ってもらいたい。自分のためにも皆のためにも、人間味のある組織をつくるためにそういう意識を大事にしてもらいたいと思うんです。**

**人間の本質が理性から感性に変わっていくということは、経営の姿勢においても当然その変化が出てくるわけであって、その意味では理性型の経営というのは、支配と命令と管理の経営と言われます。縦型の組織・社会というものを前提にして、上意下達という構造で企業が動く。そのためにはどうしても企業というものは、支配という力が強く働きますし、命令に従って動くことになっていきますし、非常に管理意識が強くて規則で皆を縛っていく。管理的な意識が非常に強い。これが理性型の経営で、支配と命令と管理の経営とよく言われます。これからはそういう心遣いを大事にしていって、感性をベースにして仕事をしていくことになれば、経営においても縦型の社会でなくて横型の社会に対応した、感性型の経営を考えていかなければならない。そこではどういう精神がその基本になるのかと言ったら、愛と対話とパートナーシップ。そういう精神を大事にし、基本に据えながら経営も行われていく。これが人間の本質が理性から感性に変わったと言われる人間観の激変に対応した企業経営における原理的変革というものの内容であります。**

**本当にいろんな面で原理的変革が求められていて、これまでの我々の活動の仕方、生き方というものを本当に新しい時代に合うように激変させていかなければならない。ということをもっともっと真剣に考えていく必要があるのではないかと思います。いつまでも古いやり方が改善されないという組織が多いんですけど、そこを思い切って新しい時代に対応する在り方に変えていく。ある意味で勇気が必要なことだと思うんですよ。古いものを壊して新しいものをつくるのはなかなか勇気がいること。しかし、古いのを壊さないと新しいのはつくれませんので、破壊的創造という言葉がよく使われますけど、創造力も破壊すること、壊す力がその力を生んでいくので、壊せない人間は新しいものをつくれない。どんどんどんどんより良い方向性の変化をつくり出す、創造的な生き方というものを受け入れていくような企業体質が大事です。変化を恐れない。変わることに、変わるということに、希望・期待感を持ってやっていく。そういう精神が非常に大事な時代ではないかと思います。**

**その意味で、今、消費者・人々は皆、変わらないことを求めているのではなくて、政治も経済も社会もいろんなものがより良い方向性に変わっていくということを求めている。そういう時代ではないかと思うんですよ。理性というのは固定化させる能力なんですが、感性は変化を求める能力なんです。今は理性の時代ではなくて感性の時代。変わることに感動するというか、変わることに興味を持つ、変わることに期待感を持っているのが、今の消費者の心情ではないかと思います。今の政治の状況を見ても、古い政治の仕方から変わっていかない、国民はもっともっと斬新な新しい政治手法を求めているんだけど、なかなか国民に未来への夢と希望を与えることができるような、新しい政治の仕方をする政治家がなかなかこう出てこない。そういうところにもやはり、国民は苛立ちを感じているということですよ。そういうことからすると、どういう風にしたらより良い状況に今を変えることができるのか。ということを考えると、今一番求められているのは、創造力。より素晴らしいものをつくり出す、より素晴らしいものに現実を変えていく、という創造力というものが非常に要求されている時代ではないかと思います。それが、時流独創。ときの流れは自分がつくるという精神になる。**

**基本的に人間が生まれてくるのは歴史をつくるためなんです。何かしら今までにない新しいものをつくっていく。 歴史をつくるということが、人間が生まれてくる最も根源的な理由。何のために一体我々は生まれてきたのか。それはただひとつ、歴史をつくるためである。新しい時代をつくるために我々は生まれてきたんだ。社会をよく見れば、10年20年30年経つごとに、どんどんどんどん社会の中には今まで無かった新しい商品・製品が生まれる。古い時代の人たちが全く考えもしなかったようないろんなものが出てくる。それが時代の実装ですから、明らかに時代は歴史を刻んで歴史をつくりながら動いている。また、それをしているのは人間です。ですから我々は、自分がそう思うと思わないとも、とにかく歴史をつくるために、新しい時代をつくるために活動をさせられている。そういう風な感じになってくると思うんですよ。そういうことを大きな流れから見ていくと、いつの時代でも人間は歴史をつくるために生まれてきており、新しい時代をつくるために生まれてくるのだと、言わなければなりません。新しい時代をつくろうと思ったら、やはり過去の人間が誰もやったことがないことを何かしないと、新しい時代はつくれない。歴史はつくれません。だから、本当にいつの時代も我々が求められているのは、創造力ではないか。**

**では、どういう風にすれば、夢の持てない、理想のない時代に創造力を持って逞しい未来への希望を語り、希望をつくり出すことができるのか。どういう風にしたら、創造力を持てるのかを考えなければならない。なぜ我々は歴史をつくるために生まれてきたと言えるのか、そう言える学問的根拠は何か。生まれてくる子どもというのは、両親から遺伝子をもらって生まれてくる。子どもというのは過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。生物学的にはそういう生まれ出方をする。すなわち、子どもというのは常に親を超えて生まれてくる。過去の人間のふたり分の力を自分ひとりに与えてもらって生まれてきている。親が子を思う、そういう命の流れの中にある原理であります。生まれてくるものは人間以外もそうですが、子どもは常に過去の人のふたり分の可能性を持って生まれてくる。子どもは親を超える生き方を何らかの点でしなかったら、本当の命の活かし方、使い方ができていないんだということが言えるわけです。お父さんお母さんから遺伝子をもらって生まれてくるだけでは、創造、新しいことをすることはできないんですよ。それは、遺伝子は過去ですから、両親からもらってくるだけでは、過去を超える生き方はできません。**

**ではなぜ、子は親を超えるという生き方をして、歴史をつくるということを今日までやってきたのか。命というのは有機体ですので、両親からもらった遺伝子が自分の命の中で有機的に絡み合って、その相乗効果・シナジー効果として出てくる力がその子の力なんですよ。相乗効果・シナジー効果、出てくる力は過去になかった全く新しい力なんですよ。だから、子どもは誰でも過去の人間が誰もやったことのないことをするという可能性を皆、与えられて生まれてくる。ですから事実の問題として、いつ時代も大人たちは、「今の若い者は」と言って、その若い者をバカにして頼りにならないと言って、こんなことでは未来を任せられないと言う。いつの時代でも言っている。大人たちから頼りにならない、何かしら馬鹿にされたようなことを言われていた若者たちが、何十年経てば必ず大人たちがまだ見たことのない未来をつくる…。そして時代をつくり、歴史をつくってきた…そういうサイクルが歴史の事実です。**

**そうしたことがなぜできるのか。それは、自分の命は有機体であって、両親からもらってきた遺伝子が、命の中で有機的に絡み合って、その相乗効果・シナジー効果として湧き出てくるのがその子の力だ。相乗効果だから、過去になかった全く新しい可能性・力が湧いてくる。だから、子どもは誰でも今まで誰もやったことのないことができる力を何かしら与えられて出てきていると、言うことができる。この時代に生まれてきたからには、過去の人間が誰もやったことのないことをやって生きて死んでいくぞ、と思わないといけない。そういうことが原理的に言えるわけです。生まれてきたからには、今やっている仕事で過去の人間が誰もやったことのないことを何かひとつはやって生きて死んでいくぞ、と。それが激動の時代において、仕事をするプロの職業人の心意気だと言えます。皆、過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてきているんですから、確実に子は親を超えなければならない。そういう可能性を持っているわけですよ。しかも、自分の力は相乗効果として湧いてくるものですから、誰でも過去になかった新しいことを何かしらできるという力を持っている。それがその子の可能性と言えます。それを自分の今やっている仕事を通して、表現・実現していくということをしなければならない。では、どうしたら歴史をつくる力は開発されるのか。どのようにして実際に行動、実践的に出てくるのか。創造力を仕事の中で使っていこうと思ったら、ふたつの重要なやり方、原理があるんですよ。**

**ひとつは、仕事をしながら現実への違和感を大事にする。現実への違和感とは、「何かちょっと便利にならないかな」とか「ここのところ、納得できないな」とか「何かおかしいんではないかな」と思うこと。これが実際、自分自身が仕事の中で何かしら創意工夫ができる、創造的な仕事ができるきっかけになる。もっともっと我々は現実への違和感という感性の実感を大事にする。感じるということを大事にする。問題を感じなければ、新しいことはできません。まずは問題を感じることが出発点。問題がなければ何もしなくていいんですから、問題があるから・感じるからなんとかしないといけないと思う。そういう気持ちが湧いてくる。まずは、現実への違和感というものを大事にする仕事の仕方をぜひやってもらいたい。仕事においても、ただ言われたことを言われたままにやっているだけではなく、その中で「ここのところ何か納得できないな」「ここはおかしいな」「もうちょっと便利になったらな」という思いを大事にする。それは、現実に存在するものに対する違和感というもの。問題意識とも言えます。これを持つことによって、我々は「どうしようか」と考える。そして、何かしら新しいものをつくり出す。**

**この現実への違和感という感性の実感は、どういうものなのか。やっていることに対して納得できないとか、存在するものに対して納得できないところがある、もう少しこうならないかなと感じることは、自分自身の潜在能力が今存在するものよりも成長していないと、今あるものに対して「もうちょっとなんとかならんかな」とは思わないし、問題意識は出てこない。ということは、現実への違和感を感じるということは、確実に自分の持っている潜在能力が、今あるものよりもすでに成長していっていることの証明。今社会に存在するものに自分自身が納得し、これでいいと思っていれば満足する。今存在するものよりも劣っていたり遅れていれば、今あるものを素晴らしいと思って感動するんですよ。感動もしない満足もしない、「何とかならないか」と思うということは、もうすでに自分の持っている潜在能力が、今あるものの水準よりも遥か上に成長してしまっているという証明なんですよ。自分の持っている潜在能力がすでに現実よりも成長してしまっている場合にのみ、違和感を感じるということなんです。**

**そういう違和感は一体何を意味しているのか。「何かここのところ便利にならないかな」と感じる違和感は、「君こそまさにそこのところをもうちょっと便利にするために、この時代に生まれてきた人間なんだ。君がこの時代に生まれてこなかったら、こういう問題には出会わないんだ。この仕事をするために君はこの時代に生まれてきたんだ」、「それが君の使命なんだ」と、直接的に天が自分に教えてくれる。それが現実への違和感、感性の実感なんです。それは、自分がなぜこの時代に生まれてきたのかという出生の理由を教えてくれている。そして、この時代に自分は何をしなければならないのかを語りかけてきてくれている。天の掲示、天啓の一瞬なんだ。多くの人はこの天啓の一瞬、現実への違和感というものを何度も直面しながら、それに対応しないでスルーしてしまっている。「誰かやるさ」と、自分でしない。これは非常にもったいないと言うか、チャンスを見逃しているということになってしまうんですよ。もっともっと自分の命から湧いてくる現実への違和感を手がかりにして価値ある仕事をする・人生をつくっていかないといけない。とにかく、現実への違和感は大事な現象です。今まで誰もやったことがないことができるという仕事を、自分に与えてくれているということなんですよ。**

**自分が仕事しながら「なんか納得できないな」と思うことは、同じような仕事をしている人たちも皆感じていることなんですよ。だけど、なかなか自分がやってみよう、自分が先頭切ってそれを何とかやってみよう、という気持ちになかなかならないんです。皆、「まぁ、いいか」「誰かがやるさ」とスルーしてしまっている。だから、今自分のやっている仕事から湧いてくる現実への違和感というものを大事にして、どうしたらそれができるんだろうと思って考える。そういう積極的な対応をしていったならば、自分と同じような仕事をしている同業者なら皆感じている問題なんだから、自分がそれを何とかして、自分が納得できるところまで現状を変えれば、たちまちにしてその人は同業者の中でトップに立てる。そういう地位が約束をされているんだ。それぐらい価値のある仕事を教えてくれるのが、現実への違和感という感性の実感なんだ。これが最も現実的な創造力というものを自分が形にしていく、大事な原理です。もっともっと我々は、仕事をしながらふと湧いてくる現実への違和感というものに、命を懸けることをやっていかないといけない。そうすると、確実に我々は今自分のやっている仕事で歴史をつくれますよ。事の大小を問わず、「このことはあいつがやったことだ」と評価されたり、「これは俺がやったんや」と堂々と言える。確かにこの時代に俺という人間がいた、という命の刻印を歴史に刻んで死んでいける。そういう人間になれる。それほどの価値ある仕事を自分に直接的に与えてくれるのが、現実への違和感という感性の実感なんですよ。**

**しかも、現実への違和感という感性の実感を持った人間が、本気になってやろうと思ったら、確実に自分が納得できるところまでは現実を動かせるんだ。自分が納得できるところまでは歴史がつくれる。その力があるんだということを教えてくれる。自分の潜在能力が現実よりも成長してないと、違和感を感じないんですから、だから自分がやる気になったら自分が納得できるところまでは現実を動かせる、という力があるんだということをその現実への違和感は証明しているんですから。力があるんだから、確実にやろうと思ったらやれる、できるんですよ。それだけの価値ある仕事をさせてくれるのが、現実への違和感という感性の実感なんだ。自分でやれなくても、そういうことを会社に提言・提案して、会社全体がその提案に従って動いていくかも。ということは自分の提言・提案で会社が発展したとなれば、もっともっと我々は会社に対して愛着を持って、会社のために頑張ろうという気持ちになれると思うんですよ。会社の仕事に生きがいを感じるようになってきますよ。自分でやろうと、あるいは提言して会社にやらそうとも、どちらにしても感性における現実への違和感という実感を大事にして、それをきっかけにして新しい何かをやっていく。そういうことをぜひ考えてみてもらいたい。とにかく、皆良い方向に何かしら変化することを期待しているんですから。その方向付け、というかその提言ができる自分を作っていってもらいたい。自分が何かしら納得できないことがあったら、是非上司にも伝え、経営のトップにも伝えて、より良い方向製の変化を促す働きをして、会社を発展させる働きに関わってもらいたいと思います。いろんなサービスなんかでも「もっとこうした方がいい」という提案をどんどんして、そしてより消費者が満足できるようなサービス、仕事の仕方をしていってもらいたい。そのためにも、どんな小さなことでも現場で感じた現実への違和感という感性の実感を手帳に書いたり、メモしたり、上司に話したり、何かをしてウヤムヤにしない。常に形にしていく努力をしてもらいたい。**

**私も今お話している感性論哲学をつくり出すことできたのは、学生時代に勉強しながら「ハッと」気づいたことをノートにメモ書きしていたんですよ。私は大学の頃から感性論ノートという自分の気付きを書き留めるノートをつくりました。それをいつもポケットに持っておいて、「ハッと」思ったら書き留めていました。後から思い出そうとすると、なかなか出てこない。その瞬間に書き留めておかないと、なかなか出てこないんですよ。そのときの着想というのは、そのときの雰囲気、環境、場、時間ものから湧いてきたものですから、後からは出てこない。だから、気付きノートが必要になる。ぜひつくってもらいたい。大きな示唆を与える資料になる。これも現実への違和感を心に残す、なくならないようにする重要なやり方です。自分だけの発想、気付きを書き留めておいたら、何かの会議や何かのときに提案の資料になる。とにかく、創造力、独創的な力、時流独創の精神を自分自身のものにしたいと思ったら、現実への違和感・気付き・問題意識を大事にする。現実への違和感を原理にして仕事をしていく。そこに改良改革・創意工夫・原理的創造…いろいろ変えていくという出発点が、そこにあります。**

**もうひとつ、現実的に大事な創造力のつくり方として大事なこと、考えていないといけないことは、常識で考えない。常識を考えるという習慣を身につけること。常識で考えていては何も変わらない。今は激変が求められている。激しく変われよと時代は要求している。だから、我々は常識を考えないといけない。常識をそのままでいいと思っていたら何も変わらない。とにかく、あらゆるものを変えないといけない。何をひとつ取っても今のままでいいということはない。全部変えないといけない。だから、今こそ常識を考える時代なんだ。常識で考えていては、保守的になってしまって何も変わらない、安定状態になってしまう。激変が求められている。常識も大事だが、半分は激変の時代なのだから常識を考えるということをして、何かしら少しでもより良い方向性の変化をつくり出すために、常識を考えるくせもつけることをしないと、創造力を実践的に使える人間にはなれません。何ひとつ取っても、今のままでいいものはない。自分の身の回りにあるもの全部変えないといけない。それには、常識を考えるということも大事な仕事。**

**そのためには、たとえなんの疑問がなくても「これは果たしてそうだろうか」と、言ってみる。「本当にこのままでいいのか」と言われたら、「まぁ、そのままでいいわけはないよな」となって、「では、どうする」となる。創造的な気持ち、意識が芽生えてくる。とにかく、学問の世界でも今百科事典に書かれていること・真理と言われていることは、30年経ったら半分は全面的に書き直しになるんですよ。あとの30%は部分的に修正しないと載せられないと言われているんですよ。30年経っても今書かれていることは、そのまんま東と申しましょうか、さんまのまんまでそのままにしておけるというのは、20%もないと言われています。今、真理だと学問で言われていることが、30年で80%は嘘になってしまう。どんなに確かそうに見えることでも、本当にそうなのかと言ってみる価値は十分にあるんですよ。明治維新から100年経ったら、世の中もめちゃめちゃに全部変わるんですから。100年経ったらこんなに変わるのか、と。誰が変えたのか、それ以降に生まれてきた人間が変えたんだ。自分たちも100年経ったら「こんなに変わってしまったのか」と言われるほどに変えないといけない。それが人生を生きるということなんだ。激しく変えないといけない、全部変えないといけない。仕事は山ほどある。特に今は変えないといけない。激しく変えないといけないことを要求されている以上、何をどう変えたらいいかわからんことほど、じれったいことはないですよ。全部変えないといけないのだから、何かを変えようとしなければならない。どんどん会社にも提言していって、皆が提言していって皆の力で仕事・サービス・会社を良くしようと思ったら、皆が善意の変革の力を持ち寄って、変えていくことに関わってもらいたいと思うんです。**

**企業経営からしたらそういうことなんですけども、今の実社会を見れば政治を見ても経済を見ても社会を見ても、なんか停滞感があって、なかなか目が覚めるような変化が見えてこないんですよ。これは全体として人間が創造力をなくしているんですよ。創造力を衰退させてしまっている。なんでこんなに創造力が衰退したのか。自然科学の、サイエンスの分野で毎年毎年ノーベル賞をもらうような方が出てきて、いろんな発見をして、とそういうところがあるんですけど。だけどサイエンスの世界というのは事実を探求するという世界なんですよ。だから、事実を詳しく調べていくと今まで考えていたことは間違いだったと分かってきて、新しい知識が生まれてくるということがあるんですよ。だけど、事実を根拠にして研究していく科学的な精神というのは、どうしても最終的な事実を大事にするものですから、自分の考えたことが正しいか間違っているかを事実に照らし合わせて考えて、間違っているとか正しいとかということ言うわけなんです。そうすると、どうしても人間は事実に縛られて、支配されるという意識が根付いてしまうんです。その科学的な真理の探究ということをしていると、皆、事実に縛られてしまって、その結果として事実を破壊して新しい世界をつくるという発想が全然出てこないんですよ。自分の考えていることが正しいか間違っているかは、事実に照らし合わせると分かるとなってくると、事実が変わらなければ何も変わらないという状態になってきて、事実に拘束されて縛られてしまう。現在の学校は、ほとんどの教科が科学的な教科ですので、学校に行って勉強すると事実に縛られてしまって、事実ではないもっと素晴らしい理想というものを描くことができなくなってしまった。世界に素晴らしい指導者がたくさんいても、「21世紀の世界をこのように素晴らしい世界にしよう」と言う指導者が誰もいない。そうなったのは、あまりにも科学的な考え方に支配されているから。どうしたら理想が描けるようになるのか。**

**科学は事実を探求するんですけど、哲学はもっと幸せになりたいという幸福欲を原理にして生まれてきたものなんです。サイエンス=科学はもっと良く知りたいという認識欲を出発点にして出てきたもの。事実をもっとよく知りたいということがあるから、科学は事実に縛られる。哲学こそ現実を否定して、より素晴らしい未来を考えていく。理想を描く、夢を描く、理念、目標を設定する学問が哲学。もっと事実に拘束されることなく、未来を考える哲学的精神を学校に取り入れていかないと、理想・夢を描く力は回復してこない。科学は認識欲を実現する学問。哲学は幸福欲を実現する学問。もっと幸せになりたいと思ったら、未来に理想とか理念とか希望を考えないといけない。哲学的な思考能力を養っていくことによって、我々は事実に拘束されることなく、事実を破壊して、現実を破壊して、現実を批判して、そしてより素晴らしい事実を思い描く。そういう理想をつくる力が哲学をすることで湧いてくる。**

**残念ながら現実は、非常に哲学が衰退していて、「哲学なんて要らない」と言って、全然哲学に関心興味を持たない人が多い。世界にはこれと言って有名な哲学者はいない。1980年までは哲学に全然関係ないような人でも、名前を言ったら知っている哲学者が必ずいたんですよ。20世紀の有名な哲学者というのは、マルティン・ハイデッガー、カール・ヤスパース、一番有名なのはジャン=ポール・サルトルですよ。こういう世界に名の知れ渡った錚々たる大哲学者が1980年まではいたんです。それが、1980年にジャン=ポール・サルトルが死んだことにより、世界に名の知れた哲学者がいなくなってしまったんですよ。そういうこともあって、哲学が衰退したというか、興味を持つ人が少なくなってしまった。そして結果として社会は、情報化社会といわれて知識や情報を持った人間が勝つんだと言われ、情報化社会でますます知識や情報に縛られて、事実に拘束されて夢を持てないという状況になってしまった。これは人類にとって不幸なことですよ。政治の一番大事な仕事というのは、国民に未来のへ夢と希望を与えることなんだ。経営者の最も大事な仕事は、社員に未来への夢と希望を与えることなんだ。親の一番大事な仕事は、子どもに未来への夢と希望を与えることなんだ。政治も経済も家庭生活の親も、子どもに未来への夢と希望を与えることができなくなってしまった。もちろん部分的に夢を子どもに与えられている親もいるんですけど、でも大まかに言って夢を語る力、理想を語る力というものが衰えてしまっているのが実情です。**

**それは、先見力、未来を見通す力というのをつくる原理を見失ってしまったんですよ。どうしたら素晴らしい未来というのを考えることができるのか、そういう先見力をつくる力というものがなくなってしまっているんです。本当に我々が何百年先の未来にまで的確に言える先見力を養おうと思ったら、基本的な歴史観、歴史を哲学的に見通す目という哲学的歴史観を持たないと、未来というものを確実に思い描く先見力は出てこないんですよ。そういう歴史観というものを持ち、現実を眺めることによって、時代の流れから未来を先見する。どういう風にしたら我々は今の時代に生きていながら、何百年先というものを見通すことができるのか。その力はどうしたらつくられるのか。何百年先とまでは言わなくても、何十年先でもいいんです。先はこのように変わっていくんだ、という未来に対する変化の道筋というものをちゃんと意識できる力は、どうしたらつくれるのか。これもやはり企業経営には必要ですよ。仕事をしていく上でも、そういう見通しを持ってやると違ってきます。家というのはやはり、30年50年保つものですから、そういうことを考えながらどういう家を建てるかの提言をすることも、プロとして消費者に対する見識として非常に大事な課題なんですよ。今良ければいい…これではダメなんです。30年先、50年先でも大丈夫という宝物を提供するのが建築業ですから。目先に振り回されていたらいけない、見通しを持って提言するという力が、やはりプロとしての見識として必要なんだ。**

**どうしたら先見性というものを持つことができるのか。そのために歴史観を養う必要がある。そうすると、今我々が生きている現実を近代から次の新しい時代への過渡期なんだ。大きな節目なんだ。古い時代は欧米の時代でもう終わった。これからはアジアの時代になってくるんだけど、まだ欧米が力を持っているし、まだアジア未熟な後進国。その過渡期なんだ。時代の流れは、脱近代というキーワードで動いているんだ。という見方を今の時代に生きる我々はしていかなければならない。近代から脱却していくという流れで動いているんだ、という風に見ることが大事であります。ついでに言うならば、これまではアメリカが偉大であった。やがてこれからは中国やインドが台頭してくる。でも、中国もインドも後進国で欧米から比べたら文化水準は低い。まだまだ中国やインドは世界の指導者になり難い。アメリカやヨーロッパは強大な力を持っている。確実にときの流れは欧米衰退の道を辿っていて、ドルやユーロは暴落していって、元や円が力を持つ時代に変わっていく。中国がどんどん影響力を持ってのし上がってきている。残念ながら中国は後進国だ。政治の体制においても共産主義体制と、近代的な政治イデオロギーに支配されている。まだ中国はアメリカに代わって世界の指導者となる資格を持っていない。だけども、やがては中国が世界を支配することになってしまう。今の時点を考えたら、世界の指導者となってくるには、まだ200年の年月を要する。それまでの間、誰が世界の中心を担って歴史を動かすのか。日本人しかいない。今、世界文明の中心は、日本の真上にあるんだ。我々、日本人こそ今の時代の指導者となって時代を西洋から東洋へと動かして、これまでの西洋とは違う全く新しい文明である、アジアの文明をつくる基礎を日本人がつくっていかなければならない。**

**理性の時代から感性の時代へと精神原理を移行させるための指導力も、日本人が務めなければならない。あらゆる意味において日本人が、今の世界の中心となって全人類を夢多き未来へと導いていく役割を果たさなければならない。脱近代という次の新しい時代へと進んでいく流れの中で、今日本の真上に世界文明の中心があるんだ。日本人は近代から次の新しい時代の過渡期を担う、かときっちゃんなんですね。その使命を日本人はもっともっと強く自覚して、今こそ我々は世界の指導者となって人類をより夢多き未来へと導いていくという役割を果たさなければならないんだ。そういう気持ちを持たなければならない。では、どういう仕事をしたらいいのかを考えるために、今の時代は脱近代へと向かっていくという時流で動いているんだ、ということをしっかり掴まないと、我々がどう世界を変えたら良いのかの方向性が見えてこないんですよ。政治・経済・社会の未来を日本人がつくり出して、それを中国人に渡して「では、あとは頼むよ」言って、次の新しい時代を中国人に託すというつなぎの役割を果たしていくのが日本人だ。脱近代の時代を生きるそういう民族なんですよ。脱近代という過渡期というのは、時代と時代の間の半端な時代だと思うかもしれませんが、だけど歴史を振り返るなら過渡期こそ最も素晴らしい時代だと言えます。というのは、今我々が迎えている現在は、人類史上第三の過渡期と言えるものです。第一回目は、古代と中世との間、ギリシャ・ローマ。第二回目は中世と近代の間、ルネッサンス。というように、過渡期は決して貧しい、半端な時代ではない。過渡期こそ文明・文化の最も熟成した最も高度な文化が栄えた時代。ギリシャの時代とは、石の文化を最高到達点まで持っていったのが、ギリシャ人たちの活動だったわけです。過渡期とは、最も熟成した完成度の高い文化となった時代。ルネッサンスも芸術、彫刻も完成度の高い活動がなされた時代。そのことを考えたら、日本人がこの過渡期を担って活躍しなければならないということは、これから第二のギリシャ人となり、第二のルネッサンス人になるということ。それほどの壮大な期待や夢を持って、これからの200年を生き抜いていかないといけない。日本の素晴らしい時代はこれからやってくるんだ。これからの200年が、日本民族の本当の底力が発揮される最も素晴らしい時代なんだと考えれなければならない。**

**これから1000年を支配する新しい建築文化を日本人がつくって、それをアジアに提言するということをやっていかなければならない時代なんですよ。まだまだアジアの建築は西洋的なビルディングをつくる、高層建築をつくるということに支配されていますが、これからの地球環境を考えれば、動物と植物が50%と50%でお互いに助け合って生きていくことができる環境をちゃんと整備しながら、建築をつくっていく発想にならないと、環境と建築がちゃんと合致しない。環境問題と建築の仕事というものが矛盾なく進んでいくことにならない。高層建築を建てることはあってもいいんですけど、たくさんの緑を残す。こんな大都会みたいに全く緑のない、高層建築、コンクリートビルばかりの発想を持ってはいけない。これからは緑を50%は残す。その緑の中に建物を建てる。環境と建築が矛盾をしないように考えていくような発想が、これからのアジアの文化づくりにおいては大事なことになってくる。これはヨーロッパ的な街づくりとは全く違う発想なんだ。自然と敵対するような欧米ではない、自然と融合しながら行っていく。人間も自然なのですから、自然の中で生活する。明らかに欧米とは違う、新たな建築思想が出てくるはずだ。そういうこれからアジアの時代を1000年間支配するアジアの建築の基礎を日本人は築いて、それを中国人やインド人の方に教えていって、日本人が指導者となってアジアの時代をつくっていく貢献をしていかなければならないんですよ。その意味では、過渡期を担う日本人はまさにこれからのアジアの1000年間を支配する、新しい概念をつくり出すという責任がある。**

**そういうことを考えても、今の時代は近代から次の新しい時代への過渡期。だから今の時代の流れは脱近代という方向性で動いている。脱近代をキーワードに使いながら未来を考えていった場合に、確実にこうなるという未来を見ざるを得ないという未来が見えてくる。政治はどう変わらなければならないのか、経済はどう変わらなければならないのか、社会はどう変わらなければならないのか。そのことを、根拠を持って語るためには、今の時代を脱近代というキーワードで考えるということが、大事な原理なんですよ。そういう発想を持つためには、歴史観、歴史というものがどのように動いているか、いついつにこんなことがあったという歴史学的な事実ではなく、歴史を哲学的に考えて、そして哲学的に解釈をするというやり方をもって我々は、今の時代のキーワードを掴みだし、そして未来というものが確実に思い描くことができる先見力を養っていく。そういうことができるんです。**

**我々がこれからつくっていかなければならない未来、日本人がつくって中国人やインド人の方に渡していかなければならない、未来の世界の姿、それがどんなものなのかを後半の時間でお話をさせてもらいたいと思います。これから休憩に入ります。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**具体的に政治・経済・社会というものをどういう風に変えていったらいいのか、どういう激変をつくり出していったらいいのか。どうしたら政治を変えられるのか、どうしたら経済を変えられるのか、どうしたら社会を変えられるのか、またどういう政治を国民は求めているのか、どういう経済を国民は求めているのか、どういう社会を国民は求めているのか、そのことを根拠を持って語るにはどうするか。とにかく、脱近代という方向性であらゆるものは動いていて、そしてあらゆる領域において原理的変革が求められているんだ。**

**このことからすると、政治の未来を考えたらどうなるかと言うと、近代の政治は政党政治です。政治という世界に政党というものが生まれたのは近代になってからです。近代の政治は政党政治だ。近代の政党政治というものを変えていこうと思ったら、脱近代と方向性で政治の未来を考えるならば、我々は政治というものは脱政党という方向で動いているんだと考えなければならないし、将来は政党のない政治をつくっていくということを目的にしなければならない。そういう方向性が見えてくるわけですね。政治に政党が存在する限り、近代の政治から脱却できない。国民が現在の政治や国会の在り方を見て失望を感じているのは、政党するがゆえに政治は常に権力闘争、政権闘争に明け暮れてしまって、野党になればとにかく与党の揚げ足を取って、そして内閣を倒すということばかり必死になってしまう。全く政治家としての本分、国民に未来への夢と希望を与えるという仕事を忘れてしまって、汚く総理大臣や大臣を罵って、そして自分たちが政権の座につくことばかりを考える。国民から見て醜い政党・政治の在り方というのは、政党という存在がつくっているんだということを我々は考えてみなければなりません。政党が存在する限り、政治は数の政治、数の暴力がまかり通ってしまう。そういう状態から脱却しない。数さえ集めたら勝てるというのが政党政治。であるがゆえに、自分たちの政党に属する議員を増やしていくために、スポーツマンや芸能人を立候補させて人気投票みたいな感じで議員を増やすようなことを考える。どういう政治的な仕事をしたいのかわからないような人がいっぱい政党にはいて、そういう人たちが頭数を揃えて、そして数の力で権力なる政治家がいろんな政策を遂行していく。そういう数さえ集めたら勝てるという形がまかり通る政治、あるいは政治の世界が権力闘争に明け暮れるという在り方、そこに国民はなんとなく納得のできない問題を感じているのが、現在の国民の政治に対する意識ではないかと思います。**

**そういう政治の世界における矛盾というものから脱却していくためには、我々は政党のない政治をつくっていくことを考えなければならない。政党のない政治をつくっていくためには、まずもって今日の政党政治というものを支配している原理が、多数決原理だということを考えてみなければならない。多数決原理という原理がある限り、数さえ集めたら勝てるという政治はなくならない。だから、基本的には脱政党という形で政治を変えて、政党のない政治をつくっていこうと思ったならば、まず我々は多数決原理を破棄しなければならない。数さえ集めたら勝てる量の政治・考え方から脱却していって、質の政治に変えていかなければならない。とにかく今は、あらゆるものが量的な考え方から、質的な考え方へと変化している時代なんだ。**

**企業経営も大きな会社をつくるということを目的にしてはならない。大きな会社をつくろうと思ったら、必ずその限界があって、また同業他社との競争に追い込まれてしまって、そして潰れてしまう。本当に会社が永続的な発展を遂げようと思ったら、量の拡大を成長と考えるのではなくて、質の向上を成長と考える体質に企業が変わっていかないと、永遠の成長・無限の発展は不可能です。いろんなものが量から質へと価値観を変えつつある。であるがゆえに政治も量を原理とした政治から質を原理にした政治へと変えていくことが、政治を変えていく流れとして考えなければならない課題なんですね。そのためにも多数決原理というものをしていかないと、政治は近代から脱却できない。どうしたら一体我々は多数決原理から脱却して、新しい政治、政党のない政治をつくることができるのか。**

**そのためには、今の時代というものが統合という概念で動かされているということを考えなければならない。統合という言葉は、現在の時代のいろんな変化をつくるキーワードになっているわけです。新聞を見たら統合という言葉が嫌と言うほど出てくる。だけど、20年ほど前、21世紀になるまでの新聞の中には、統合という言葉はほとんど出てこない。21世紀になってから。統合という言葉があらゆるものを動かす原理として盛んに使われる。統合の時代。あらゆるものが結びつきを求めている統合の時代という流れから考えてみると、我々はいろんな考え方を結びつけて、質的に発展させていく論理構造、議論の仕方を考えていかなければならない。そういうことを感性論哲学でどう言っているかと言うと、統合的集約原理。あらゆるものを統合していって、そのことによって物事を集約し、結論を導き出す。これを議論の結果を出す方法論として考えていかなければならない。多数決原理から統合的集約原理へ。多数決原理というのは、数を集めて数の力で押し切って、勝っていくやり方=量の政治。統合的集約原理は、質の政治。いろんな考え方がお互いに関わり合うことによって統合が進み、成長していって結論が出てくるやり方。それにより、政治における議論の仕方を激変させていって、やがて政党が存在しなくても政治をちゃんとやっていける状態をつくっていかなければならない。でないと、政治の世界でお互いに罵り合って、勝ち負けを争う醜い政治家の姿はなくならない。そのためには、どういうシステムが大事になるか。**

**政治とはあるテーマで議論をする。議論をすれば必ずいくつかの意見が出てくる。4つほどの意見にまとまってくるとすれば、それぞれの意見にそれぞれのグループができるわけですよ。そのグループが固定化されてしまったら政党になってしまう。だから議論というものは1回限り。違ったテーマで議論をしたら、また違った人と同じ意見になるかもしれないんだから、一旦できたグループは一回限りとして固定化してはならない。「政党はつくってはならない」を原則にまず決めなければない。一旦できたグループは一回限りだ。そして議論をするときにはどういう議論するか。4つの考え方があったなら、4つの考え方から同人数だけ代表者を出してきて、代表者だけで代表者会議をする。すなわち200人のグループと100人のグループと50人のグループと20人のグループがあったならば、各グループから2人ずつ代表者を出してきて、そして代表者が集まって議論する。これが量の政治から質の政治へと変えていく原理なんですよ。今の考え方からするならば、20人の中から2人の代表者が出てくるのなら、200人のグループから20人の代表者が出てこないと釣り合いが取れないという反論をされる方もいらっしゃるんだけど、それはまだ量に支配された考え方なんだ。質に変えていこうと思ったら数は問題ない。数を問題しないで4つ意見があったのなら、4つの意見から同じ数の代表者を出してくる。そのことによって量に支配されない質の政治ができてくる。すなわち、少数意見が多数意見と同等の資格・価値を持って、最後まで意見を交わすことができる。そういう土俵ができ上がるわけです。これが量から質へと議論を展開させていく基本的なやり方であります。**

**2人ずつ出てきた代表者たちはどういう議論をするかと言ったら、説得をしてはならない。自分の考え方で相手の考え方も打ち破って、自分と同じ考え方の人間をたくさんつくろうというのは量の考え方だ。質の考え方とは、違った考え方が4つあったのなら4つの考え方をする人々が、自分の意見へ違った考え方の人の意見の中でいいものを取り入れながら、皆が相手から学びながら議論をすることで、自分の考え方を成長させていく。これが質の議論。対話の重要な意味はどこにあるのか。対話は勝ち負けを争うものではない。対話は話し合うことによって成長することに価値がある。だから、議論も本当は勝ち負けを争うのではなくて、違った考え方にさせることによって、自分の考えが成長するというところに違った考え方の人と関わり、議論することの意味があるんだ。このことを我々は知らなければならない。人間は成長するためには、同じ考え方とばかり付き合っていてはダメ。成長するためには、違う考え方の人間と付き合って、自分にないものを相手から学ばないと成長しない。自分の意見を成長させようと思ったならば、違う考え方を学ぶことが大事なんだ。そのことによって自分の意見を質的に成長させる。皆が違った考え方から学び合って、自分の意見を成長させていくことで学び合うから、だんだん近づいていって統合的に集約されていって結論が出る。これが新しい議論の仕方。**

**このような議論の仕方を何と言うか、発展的解消の論理。発展的解消という言葉は、辞書にも載っているし、よく使われる言葉ですけど、他から学んで自分の考え方を成長させることによって、自分の古い考え方を解消していく。自分は成長することによって自分の古い考え方を乗り越えていく。自分の意見が変わるのではない、自分の意見が成長することによって自分の前の考え方を乗り越えていく。これを使うことによって、我々は自分と違う、自分と敵対する相手と付き合うことによって、相手から学んで自分を成長させていって、相手から学ぶということは相手を理解するということ、相手を知ることになる。だんだんお互いに学び合っていくことによって、考え方が近づいていき、最終的に結論が出る。これが統合的集約。こういう議論の仕方を覚えていかなければならない。**

**大事なのは、人間の考えは皆、偏見があり偏りがある。どんな立派な人間でも自分の今肉体のある場所からしかものは見えないし、どんな立派な人間でも今自分の肉体がある場所でしか判断できないし、今自分の肉体のあるところでしか感じられない。どんな立派な人間でも皆、肉体を持っている限り、考え方には偏り、偏見が出てくるわけです。だから本当には我々は正しい考え方に到達しようと思ったら、いろんな他の考え方から学び合わないと、現実に的確に対応した結論が出せない。これが不完全な人間の宿命であります。実際問題、社会というものを本当に学問的に捉えるためには、3つの目の統合が必要なんだと言われている。生きた社会というのは、自分の目から見たらこう見える、相手の目から見たらこう見える、第三者の目から見たらこう見える…3つの目を統合しないと、生きた現実は捉えられない。これが現実の学問的な社会の現実の捉え方です。人間の意識が一人称二人称三人称という三次元構造ででき上がっているものです。また、社会の空間も三次元ですから三次元という構造がある限り、3つの目の統合をしないと、生きた現実は分からないというのが、学問の常識であります。**

**これを政治の議論の仕方、政治の在り方に取り入れたらどうなるか。いろんな意見が出てくる。4つの意見が出てきたなら、それぞれがお互いに学び合って、意見を統合することによって、今の時点で最も良いと考えることができる結論というものにだんだんと集約されていく。こういう議論の仕方をすることによって、人間の意識である一人称二人称三人称というものを原理にして、より素晴らしい考え方をつくっていくという流れなんです。生きた社会を掴むためにも一人称二人称三人称という3つの立場からの意見を統合することが大事なんですから、政治の場合においても本当に偏りのない、より高度な結論を出していこうと思ったら、いろんな考え方が統合されて、そして統合することによってだんだんと成長していって、そして考え方が近づいていって結論が出るという流れをつくっていかなければならない。それが学問的な考え方として出てくるわけです。これを統合的集約と言う。**

**とにかく、学ばないと成長しないんだ。学ぶためには、同じ考え方からは学べませんから、違った考え方を持っている人間と付き合って、自分にないものを相手から学ぶ。自分にない体験が相手にあったならば、相手の体験を聞かせてもらって、その体験を自分の考えに取り入れたなら、俺の考えはどう成長するだろうかと考えていく。そういうことをしないといけない。自分の考えを成長させるためには、自分とは違う体験や経験や知識、情報、解釈を学ばないと、自分の考えは成長しません。自分の考えを成長させるために敵対する考えから学んで、そして自分の考えを成長させていって、お互いにそのことをすることによって、だんだんと考え方が近づいていく。そして意見が集約されていって、答えが出る・結論が出る。これが新しい議論の仕方。これは政治だけではなくて、会社におけるいろんな議論、会議でもこの方法を使わないと本当に会社の考え方、会社全体の考え方を成長させていくことはできない。会社としての意識の成長を本当につくっていこうと思ったならば、統合的集約、発展的解消を用いるべき。そうしないと、会社としての考え方が成長するということはありません。政治だけではなくて、会社も議論においてそういうやり方をこれから使っていかなければならない。**

**とにかくは、政治は議論の場・言論の場ですから、まず政治から変えていって、それを国民全体に広げていく。そういうことを考えていく必要があります。数の暴力というのは通用しない、質の成長というものを促すことができるような政治の在り方をつくっていこうと思ったら、多数決原理を破棄して統合的集約原理の議論の仕方に持っていかなければならない。そのためには発展的解消という、自分自身の考えの成長のさせ方を一人ひとりの人間が会得しなければならないわけであります。自分と違う敵から学んで、自分の考えを成長させて新しいより高度な質の高い考え方ができる自分になっていく。これは愛のところでも話したんですけど、愛することは学ぶことだ。相手から学ぼうとしないのは、愛がないということ。相手を学ぶことは愛があるんだ。相手から学ぶことは、相手のことを知ることになるから、相手を理解することになるから、学ぶことは愛だ、愛するとは学ぶことだ。自分とは違う考え方の人から学んで、「君と出会えてよかった。君と出会えてこんなことを学んで、こんなに成長できました。ありがとう」と言って、自分と違う考え方の人に感謝ができる。これが個性の時代の社会のつくり方だと、愛のところでお話をしたんですけども。とにかく、人間はどんな人でも偏見がある。だから、自分と違った考えから学ばないと、偏見を修正していくことはできないんだ。**

**どんな立派な人間でも今いる場所でしか判断できない。ものの見方は肉体に限定されている。今肉体がある場所からしか判断できない。今自分の肉体のある場所からしかものは見えない。今自分の肉体のある場所からしか感じられない。そういう偏見・限界というものは皆ありますからね。だから、本当に正しい、真実の見方に近づいてこうと思ったら、どうしても自分とは違う観点からものを見ている人の意見も聞く、そういう気持ちが大事になってきます。だから、今は統合の時代なんですよ。これまでは分析、分析で細かく分けていって、細分化によって発展してきたんですけど、これからは分けてきたものをどのように結びつけて、元の有機的な状態に戻すか。そういう流れが今要求されているわけであります。有機的統合が今の時代のキーワードなんだ。**

**統合、ただ結びつけるのではなくて、統合からどのような相乗効果が生まれてくるかに価値がある。統合とは言っても、有機的統合と言わなければならない。現実的には、統合という言葉しか使われていませんけどね。本当は有機的統合ということが、企業の結びつきにおいても大事なんですよ。最大の相乗効果が出てくるような統合を目指す、これが有機的統合のやり方なんですよ。とにかく、議論の仕方という点においても、そういう偏りのある考え方を持った人間がどのように自分を成長させていったら良いのか。それは、敵から学ぶ。違った考え方から学ぶ。そして学ぶことによってお互いの考えが近づいていく。お互いの体験を知り合い、お互いの経験を知り合い、お互いの知識・情報・解釈を教え合って、学び合ってだんだんお互いを理解し合って、考え方が成長していき、結論が出る。そういう流れをつくっていく議論の仕方をこれからはつくっていかなければならない。議論の仕方は、愛がないとできない。相手を敵として睨んでいるようでは、こういう議論の仕方はできない。お互いが相手の意見を尊重して自分が成長するためには、相手から学ばなければならない。違った考えを持っている人間は、自分にとって先生なんだ。自分にないもの持っているんだから、相手から学ばなければならない。そういう対立に対する解釈が生まれることによって、統合的集約という議論の仕方が成り立つことになります。**

**とにかく、政治を原理的に変革していくということは、まず多数決原理の破棄から始まる。そして、それとは違う新しい結論の出し方を編み出さなければならない。まだこれは誰も気が付いていないことですけど、感性論哲学の結論としては、統合的集約原理というやり方があることを、これからの政治のたたき台として提出していかなければなりません。とにかく、原理的に変えなければならない。政治を原理的に変えるとはどういうことなのか、ということを考えてみてもらいたい。そして今は、数から質へとあらゆるものが変化していく時代なんだ。量の政治から質の政治へと変えていく。量に支配されてはならない。そういう政治とは何なのか。**

**量から脱却していく唯一の方法は、どんなに数の多いグループからでもまたどんなに数の少ないグループからでも、出てくる代表者は同じ数だということ。これが、量から質へと転換させる唯一のやり方。このこともまだ誰も気が付いてないんだ。これから我々は、今までも誰も考えたことがないこと、誰もやったことないことをやって、考えていかないと、原理的変革に対応した激変の時代を生きて、時流独創の変化の最先端に立って、時代・歴史をつくっていくことはできません。とにかく、政治に政党があってはならないんだ。政党があることが政治を混乱させているんだ。政党こそ最大の悪だと是非皆さんに考えてみてもらいたい。今議員の中でも無派閥とかそういう派閥に支配されないという立場の政治家が増えてきました。地方政治ならほとんど無所属で立候補する人が多い。国民自身が支持政党なし、という方が多いような状態ですから、本当に国民の意見が政治に反映されるならば、もうすでに政党のない政治になっていなければならないんですけど、なかなかシステムが固定化されていますから、柔軟に国民の意見を吸い上げることができなくなっていますので変わらない。だけども、国民の本当の気持ちを国会に反映させるならば、もうすでに国会は政党・派閥から解放された状態で議論がなされる…そういうことができていなければならないし、またこれからそういうことを目的として、政治は変わっていくということを我々は意識しながら、政治に関わっていかなければならない。また我々自身が、政党のない政治をつくっていくという意志を強固に持たないといけない。なぜなら、国民が政治を変えるのですから。そういう国民の意識が非常に大事であります。**

**そういう風に考えたら、総理大臣は全国民の選挙で選ばなければならないと思います。政党の代表者が総理大臣になってはいけない。総理大臣は全国民の国民投票で選ばなければならない。選挙の仕方も大きく変えていかないといけない時代なんですよ。国民が男女半分ずつですから、だから本当ならば国会議員も男女半分ずつという形にしていかなければなりません。そのためには、男性は男性の候補者に投票して、女性は女性の候補者に投票して、国会議員をだいたい男女半分ずつぐらいにしていく。そういうことをこれからは行っていかなければならない。もっともっとたくさんの女性の国会議員をつくっていくということしないと、本当の国民の意見は国会において集約されません。いろんなそういうシステム的な改革は、これから考えていく必要ありますよ。とにかく、量の政治から質の政治へと変えていく。政党のない政治をつくっていくということが、まずは大きな政治における原理的変革の土台になるわけです。**

**次は経済です。経済をどのように変えていくか。近代の経済は資本主義経済ですから、今経済は脱近代という時代の流れに沿って、脱資本主義という方向性で経済は動いております。脱資本主義とはどういうことなのか。資本主義経済というのは、キャピタルリズムという、資本・金を増やすために働くという構造になっているわけですよ。だから、「俺は彼のために働かんぞ」と言っても、資本主義経済下の中で働けば、有無を言わさず金を増やすために働くということに引きずり込まれていってしまう。そういう構造になっているわけです。そして、結果として金の奴隷となって、金で苦しむ生活に陥ってしまう。これが資本主義経済下の実情であります。経済は人間のためにあるのであって、人間の経済のためにあるのではない。人間が経済の犠牲になってどうするんだ、というのが大きな反省点です。実際問題、資本主義経済社会にあっては、不況の中で多くの人間が経済に支配されて、金に苦労して借金に苦しむ、倒産に苦しみ、合理的な組織の中でノイローゼになって病気になって、精神の病を持ち、また肉体は病んでリタイアしてしまう。そういう犠牲になっている人がものすごく多いです。こんなことで本当に経済はいいのか、と。経済は人間が幸せになるためにつくったのに、経済によって人間が苦しめられている…これが一番の問題だ。**

**では、どうしたら人間のための経済がつくられるのか。そのことをもう一度原点に返って考え直してみなければならない。そういう状況になってきているわけです。経済を原点に返って考えるとはどういうことなのか。経済をつくったのは人間ですから、だから人間と経済の接点とは何なのかということを考えていかないといけない。そうしないと、経済を原点に返って考えることができない。人間と経済の接点とは何なのか。人間と経済の接点は労働である。労働という行為を通して人間は経済と関わるんだ。労働とは何なのか。人間の労働というものが経済的価値を持つためには、どういうことが要求されるのか。人間の労働は経済価値を持つためには、最低限度、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をする必要がある。人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするということによって、人間の労働は経済価値を持って金を生むんだ。人に喜んでもらえないような労働の仕方をしていたのでは、経済価値がないから金を払ってもらえない。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていたのでは会社は倒産するし、その人に注文は来ない。仕事にならない。人間の労働が経済価値を持つには、最低限、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするということが大事だ。**

**人に喜んでもらうとはどういうことなのかと言ったら、お客さんに喜んでもらっただけでは半分だ。仕事はチームを組んでやっていくものだから、一緒に喜んでもらえるような仕事の仕方ができなければプロではない。給料は会社からもらうんですから、だから会社という組織の中で一緒に働く仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方をする。それが経済価値のある仕事の仕方だ。人間の労働が経済価値を持つためには、消費者にも仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方をすることが大事。結果として金が入ってくる。もし喜んでもらえなかったら、やり直しをさせられるか、損害賠償を請求される。これが原点に返って経済を考えた場合に見えてくる人間の経済との関わりであります。**

**ということは、どういうことなのかと言ったら、職業は、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させるもの。これが職業が持っている人間的価値なんだ。これを実現しないと、経済は人間的なものにならない。職業が持っている経済価値だけを追求すれば、そこで働く人間は経済の奴隷になる。職業が持っている人間的価値を追求すれば、経済は人間のための経済に変わる。それはどういうことなのかと言ったら、なぜ仕事をするんですかと言われたら、金のためではない。「俺は俺を本物の人間に鍛え上げたいから仕事をする。経済活動をしないと俺は本物の人間にならないんだ。だから俺は仕事をするんだ」ということが言えてくる。最近は仕事をする意味が問題にされていますが、哲学的に経済を考えた場合、仕事をする意味がどこにあるのかと言ったら、金ではなくて自分自身を本物の人間に鍛え上げるため。本物の人間になるには、経済活動をしなければならない。そういう関係性になってくる。すなわち、職業や仕事というものが持つ意味は何なのか。それは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させること。そういう価値を持っているのが職業。仕事をしてみないと、どうしたら人に喜んでもらえるかが実際には分からない。机の上で自分で主観的に考えても、実際にやってみたら、「そんなことはありがた迷惑です」と言われてしまうことも。実際に仕事をしてみないと、本当はどうなのかが分からないんだ。仕事をすることによって、自分の本当の社会を生きる実力はつくられるんだ。空理空論で主観的に考えていたのでは、それは実力ではない、観念だ。実際にやってみて、喜んでもらえたら価値がある。やってみて喜んでもらえなければ価値がない。そういう仕方で我々は、自分の仕事の仕方を考えていかなければならない。職業というのは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方（客にも仲間にも喜んでもらえる）ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させるもの。**

**では、なぜ人間は経済活動をしないと本物の人間にならないのか。それは、人間が本物になるためには、どういう条件が必要になるか。人間が本物になるためには、人間と社会の実態に触れるということが欠くべかざる要素である。人間の本質社会の本質が分からなくて、人間本物にはならない。人間と社会の本質というものがちゃんと分かって、それに命が触れて、初めて本物になることができる。人間が本物になるためには、社会と人間の実態に触れることが大事だ。とはつまりどういうことなのかと言ったら、社会とはどんなに恐ろしいのか、どんなに醜いのか、どんなに怖いのか、どんなに素晴らしいのか、社会の本当の恐ろしさ、本当の怖さ、本当の醜さ、本当の素晴らしさに命が触れて、初めて人間は社会的存在として本物になる。また人間の恐ろしさ、人間の醜さ、人間の怖さ、人間の素晴らしさに命が触れる体験をもって、初めて人間は本物になるんだ。本当に命が磨かれるためには、命に痛みを感じる体験が必要なんだ。体験なしには実力はできない。人間の実力は体験がつくってくれるんだ。知識を持っているだけでは、それは観念だ、実力ではない。本当の力は、肉体が関わらないとできないんだ。肉体的に体得される。肉化される。肉体的に体得されないと実力にならない。いろんな技術でも頭で知っているだけでは、それは単なる知識であって、実力と言われるためには、覚えた技術が考えないで状況に応じて手が勝手に動くということになって初めて、その技術は身についたと言える。肉体が参加しないと実力はできない。本当に人間が本物になるためには、命に痛みを感じる体験が必要だ。どういう体験かと言えば、社会・人間がどんなに恐ろしいのか、どんなに醜いのか、どんなに怖いのか、どんなに素晴らしいのか、また社会・人間の本当の恐ろしさ、本当の怖さ、本当の醜さ、本当の素晴らしさに命が触れて、初めて人間は磨かれて本物になっていく。**

**どうしたら一体我々は社会と人間の本当の恐ろしさと素晴らしさを命で感じることができるのか。そのためには我々はプロとしての仕事をもって、弱肉強食・利害打算が働く娑婆世界の中で命を懸けて、生活を懸けて、人生を懸けて働かないといけない。プロとしての仕事をもって、生活・人生・命を懸けて働く。そのことによってようやく我々は、人間と社会の本当の恐ろしさに命が触れるという体験を持つ機会ができてくるし、また社会・人間の恐ろしさに命が触れる体験を持てる。また素晴らしさにも出会える。そういう体験を積み重ねていって我々は、だんだん社会人・人間として本物と言える力を持つことになる。ということは、我々が経済社会を変えていこうと思ったら、まずは我々の労働意識から変えなければならない。「俺は金のために働いているのではないんだ」。本物の人間になったレベルに応じて金は入ってくるんだ。まず自分自身を本物の人間に鍛え上げ、成長させるために働かなければならない。働くとはどういうことなのかと言ったら、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性、この両面を成長させていく。それが、働くということの意味である。そして、本当に人に喜んでもらえるような、本当に客からも仲間からも喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持ったならば、金は要らないと言っても入ってくる。それが経済活動というものの本当の在り方だ。自分が本物の人間になるレベルに応じて、金はわんさか入ってくるんだ。まず我々は、自分自身を本物の人間に磨き上げるという意識を持って働かなければならない。仕事を通して、自分を磨く。人間関係を通して、自分を磨く。それが経済社会で働くことの意味だ。経済社会では人間関係と仕事という両面がある。人間関係を通して、自分の人間性・人格を磨く。仕事を通して自分の能力を磨く。両面から客にも仲間にも喜んでもらえる自分になる。これが職業というものの目的である。**

**いろんな問題が出てくる。いろんな悩みが出てくる。それが全部、自分を成長させるための糧だ。問題は全部自分を成長させるために出てくるんだ。会社を発展させるために出てくるんだ。社会を発展させるために問題は出てくるんだ。犯罪すら事故すら社会を発展させるために出てくるんだ。犯罪と事故がなかったら、社会は停滞する。会社にもさまざまな人間関係の問題があり、さまざまな技術上の問題が出てくる。そのことによって社員の人間性と能力が成長するんだ。あらゆる問題は自分を成長させるために、会社を成長させるために出てきてくれている。それが問題の本当に意味だ。問題から逃げてはならない。問題こそ自分に使命を与えてくれる。問題が自分に仕事を与えてくれる。問題が自分を成長させてくれる。問題を受け入れて問題に挑んでいかなければならない。決して自分ひとりでも問題を乗り越えようと思ってはいけない。人間は不完全だ、三人寄れば文殊の知恵、ひとりで立ち行かない問題は、あとふたりの仲間の力を借りて、一緒に乗り越えていく。それが組織だ。そのために仲間がいる。皆で取り組めば乗り越えられる。だから、昔から三人寄れば文殊の知恵と言われる。それが組織力。皆が助け合ってひとりの問題を乗り越えていく。皆はひとりのために、ひとりは皆のために。ONE FOR ALL,ALL FOR ONE そのために心の繋がり、心の結びつき、心の通い合いというベースが組織には必要。仕事の結びつき、役職の結びつきだけでは、人を責めるような責任転嫁になってしまいやすい。皆が協力して団結して仕事していこうと思ったら、三人寄れば文殊の知恵という組織力というものを使って、どんな問題でも乗り越えていくということが大事なこと。これが人間のための組織ですよ。そういう経済システムのことを人格主義経済と言います。これからは資本主義経済から人格主義経済へ。人間の格をつくるために経済活動をするんだという認識に基づいた、経済社会をつくっていかなければならない。そういう流れで今経済社会は動いているんですよ。**

**最後は社会。近代は民主主義社会だ。今、世界の社会は脱民主主義という方向性で動いているんだ。民主主義ではいけない、ということですよ。多くの人たちが、民主主義であるかどうかによって、社会が良いか悪いかを判断するという近代的な基準で考えています。だけど、もはや社会の現実は近代を乗り越えて、脱近代を求めているんだ。社会にも原理的変革を要求しているんだ。だから、我々は今脱民主主義で社会の未来を考えなければならない。なぜ、民主主義ではダメなのか。なぜ、民主主義を脱却していかなければならないのか。まず民主主義社会を知ることから。民主主義社会は、封建主義の時代から脱却するために出てきた社会であります。権利を主張することが大きな特徴。権利を主張することでつくられたものが民主主義社会。義務はあまり言わない。義務を言うと、封建主義から脱却できないため。つまり、民主主義社会は権利を主張する人だけが得をして、権利を主張しない謙虚な人は損をする構造になっている。ちょっとでも訴えたら金になる。権利を主張するような自己中心的でわがままな人間だけが得をする社会。それが実は民主主義社会の実態なんですよ。権利を主張しなかったら損をする。皆が権利を主張し合うことが必要な社会が民主主義社会ですから、言ってみれば民主主義社会というのはお互いに権利を主張し合って責め合うもの。自分の持っている権利をとことん主張して、責め合って勝たないといけない。そういう構造になっている。言うなれば民主主義社会は責め合う社会なんだ。政治は与党野党で責め合う。経済は経営者と社員が責め合う。裁判は検事と弁護士が責め合う。醜い激しい罵り合いをして責め合う。そして、家庭は夫婦、親子が攻め合う。責め合う構造で成り立っている。責め合わないと権利を主張し合わないと動かない。妥協点が出てこないからどうしていいか分からない。とにかく、意見を言わないといけないということになってしまう、これが欧米の社会です。意見の言わない人間は自分のない人間だと言われる。自己主張の強い人間だけが得をする。言わなければ無きに等しい。だけども、不完全な人間がお互いに責め合ったら、この世は地獄だ。お互いに責め合って罵り合うような社会でいいものか。そういう問題が民主主義社会にはある。**

**本当に我々が、これから求めていかなければならないのは、不完全な人間が安心して生きていくことができる社会。人間が皆不完全で、皆ダメなところがある。それを責め合っていたら地獄だ。皆不完全で短所はなくならないんだから。短所がなくなったら人間ではない。人間でなくなったら神様になるんだから、不完全な人間が不完全であるがままで、お互いに安心して生きていくことができる社会をつくらないかん。そのためにはどうしても責め合うのではない、お互いに不完全だということを認め合って、許し合って生きていく、心温かな社会をこれからつくっていかなければならない。すなわち、理性で責め合う時代から、血の通った温かな心が大事だと言われる時代に変わっていくんだ。責め合うのではない、許し合って生きる精神が家庭にも必要だし、職場にも必要なんだ。問題があったら皆で協力して、皆で力を合わせて乗り越えていく。それが組織力だ。ひとりの人間の責任にしない。皆でその責任をカバーして、皆で助け合って、皆で乗り越えていく。そういう心温かな血の通った組織をこれからはつくっていかなければならない。責め合ったら地獄だ、許し合ったら天国だ。愛に基づいて許し合って生きる人間関係をこれから我々はつくっていかなければならない。そういうものが、これから我々が目指す社会の基本意識だ。**

**では、そういう社会をつくるためには、どういうことを考えなければならないか。社会には理念というものがないと、発展しないんだ。近代社会の理念は、民主主義社会の理念は、自由と平等であった。それを理想とし、理念とすることによって社会は発展し、人間性も成長した。だけども、今や自由と平等というのは、人間と社会は成長する力をなくしてしまって、自由を求めるがゆえに人間同士が半目し合い対立をし、また平等を求めるがゆえに社会の活力は低下するという状況が出てきてしまった。皆が自由を求めることによって、考え方の違いや宗教の違いで対立をする。皆が平等を求めることによって、かえって不平等が生まれた。共産主義社会というのは、平等社会を目指すもの。働いても働かなくても給料は一緒。だんだん皆働かなくて金をもらうようになってきて、だんだん国家は衰退していって、社会的な経済活動が低下していく。これが共産主義社会、社会主義社会において人類が体験した事実であります。平等はいかに人間の活力を奪うか。また自由という意識がいかに人間に闘争というものをつくり出すか。近代社会・民主主義社会は、自由と平等を理念にすることによって、確かに成長し発展してきたんだけども、もはや今日においては自由と平等はかえって社会を混乱させるための原理になってしまっていて、自由と平等はすでに理念としての力をなくしてしまった。これから我々は、自由と平等に代わる新しい理念を構築していかなければならない時代に入ったんだ。**

**では、これから目指していくべき新しい理念とは何なのか。それは平和を全人類の目標として追求していかなければならない時代に入ってきました。戦争が肯定される時代は20世紀で終わったんだ。20世紀まで戦争は美徳だった。戦争して人を殺すことは英雄だったんだ。戦争して新しい領土を獲得することは国家の発展だったんだ。今や戦争というものがいかかに醜い行為かがだんだんと意識されてきて、そして戦争のない世界を求める意識が広がってきている。これから人類は、平和の実現を理念にして生きていかなければならない状況になってきている。**

**もうひとつは、科学技術文明が発達することによって、物質的には豊かになったんだけど、人間性が非常に低落して人類の品格が劣悪化している。何とか人類の人間性、品格を取り戻さなければならない。そういうことが言われているわけです。物質的豊かさの下で人間性の崩壊、人間性の混乱は倫理の崩壊という形で言われます。人間性が崩壊している…これをなんとかしないといけない。これがもうひとつの大きな課題である。だから、これからの人類は自由と平等よりも、平和と人間性の進化・発展というものを目標にして生きる時代にこれからはなっていくんですね。平和とか人間性の進化という言葉は、西洋的な概念なんだ。しかし、これからはアジアが舞台になってくるから、アジア的な価値観、アジア的な概念でそれを表現しなければならない。これはどういうことなのかと言うと、アジアに共通する原理は、道の思想と言われているもの。インドで生まれた仏教には仏道があるし、中国における儒教には人の道があるし、老荘思想には天の道がある。また日本には神道という道がある。アジア全体を包含する原理は、道の思想なんだ。日本には道の思想が集約されて存在していて、華道、茶道、柔道、剣道などいろいろなものに道がついていて、道の文化というのは日本の中で最高の形が存在する。道の思想を取り入れないと、アジア的な価値観とはならない。**

**そこで平和とか人間性の進化をアジア的な価値観で表現しようとしたらどうなるか。平和を求める精神は、和道という言葉になってくる。道の思想というのは、人間が何かをすることによって人間性が成長する。人間性が鍛えられて本物の人間になる。そういうことを道という。柔術は格闘技なんだけど、柔を修行して人間性が成長することによって、柔道となる。今のオリンピックになった柔道は、柔道ではないですよ。あれは柔術ですね。まさに勝てばいいというもの。本来の柔道というものは、競技をすることによって自分自身の人間性を磨く、鍛える結果が出て初めて、柔道ということになってくる。花を活けることは技術なんだけど、そのことによって人間性が鍛えられたら、華道になる。だから、平和を求めていくことによって人間性が成長する。そういうことが和道として意識されなければならない。人間性が成長するのは、自分自身が気付くことによるもの。人から教えられたり、注意されて成長するものではない。この気付きのことを東洋では、悟りという。悟りと道をつけると、悟道という言葉になる。だからこれから人類は、和道と悟道という理念を掲げて、成長していくという段階に入ると考えなければならないわけです。**

**そして社会というものには社会規範というものがある。近代社会、民主主義社会の社会規範は、権利と義務だ。権利と義務ということが社会規範として社会の両輪と言われているんですけど、だけど残念ながら民主主義社会は権利の主張から始まったものですから、だから民主主義社会の実態は、できるだけ義務を果たさないで権利を主張する、ということが主体になっている。義務はできるだけ果たさないように努力をする。権利はできるだけ主張するように努力をする。そういう構造になっているんですよ。税金は義務として払わないといけないのに、節税したりなんかしている。行き過ぎて脱税になってしまっている。できるだけ義務を果たさないように、権利ばかり主張する。そういう構造になってしまっている。本来、権利は義務を果たした人間にのみ与えられるもの。これが本当の権利義務の関係性なんですよ。民主主義社会はそれが逆転してしまっている。非常に納得できない、矛盾が生じるんですよね。**

**社会規範としての権利義務が出てくることによって、対立をするという状況になってしまいますので、どうしたら対立という状況をつくり出すのではなくて、お互いに許し合う愛に基づく社会をつくることができるか。ということを考えると、どういう風に社会規範を変えていくか。そのためには、権利に対応する言葉としてこれからは、道義を用いなければならない。道義に外れてはならない。道義を常に意識しながら生きるという生き方に変わっていかなければならない。道義とは、人の道に外れてはならないということ。そういう意識が大事だということ。権利を主張するのではなくて、道義を重んじる。人の道に外れないように生きることが、非常に大事なこれからの社会の精神だ。**

**もうひとつ義務に対応するものとして、何が必要なのかと言ったら敬愛。お互いに不完全な人間として助け合い、認め合って、お互いに尊敬し合い愛し合ってやっていく。道義と敬愛。これが権利と義務に代わる新しい社会規範だ。そう考えると、民主主義社会とは違う、これからつくっていかなければならない新しい社会というのは、どういう風に呼ぶかと言ったら、互敬主義社会。これを求めてつくっていかなければならない。社会は民主主義社会から互敬主義社会へと変化していくんです。責め合う社会から許し合う社会に変化していくんだ。不完全な人間が安心して生きることができる社会に変化していくんだ。そして互敬主義社会の政治は合議政治であり、経済は人格主義経済である。そして互敬主義社会は和道と悟道を理念にして、道義と敬愛の精神で生きていく構造になってくるわけです。**

**とにかく感性論哲学では、政治は政党政治から合議政治へ。経済は資本主義経済から人格主義経済へと変えていく。社会は民主主義社会から互敬主義社会へ変えていく。これがこれから人類が目指していかなければならない未来の姿だ。そう考えているわけです。今はそういう政治を批判し、経済を批判し、社会を批判する評論家はたくさんいるんですけど、「では、それに代わる政治・経済・社会をつくったら良いか」ということは、誰も言っていないんですよ。感性論哲学の社会に対する理想というのは、まさにこれから人類が歴史をつくっていくためのたたき台になる提案だと考えております。そして、脱近代の時代を背負って生きる日本人が、こういう新しい政治・経済・社会の在り方を自ら率先してつくり出して、それを世界に輸出して、そして人類に目指すべき目標を与える。そういう活動をこれから日本人はしていかなければなりません。**

**とにかく日本人は、世界に平和を実現する盟主として活動することを世界から期待されております。それはなぜかと言ったら、平和の原点は広島だ。広島こそ世界に平和を発信する原点にならなければならない。そう考えて、日本人こそ平和を実現するための指導者としての役割を、果たさなければならないと言われております。これから我々が目指していていくべき未来は、個性を大事にする。近代は画一化が追求された時代だった。これからは個性だ。個性が大事な時代をつくっていくための指導者としても、日本人は活躍しなければならない。それはなぜかと言ったら、日本人は世界の食文化がある。日本には世界の音楽がある。日本には世界の宗教がある。でも、誰も殺し合ってはいない。家庭を見れば、仏壇もあり神棚もあり、会社に行ったら屋上にお稲荷さんがあったり、また女性のクロスのネックレスなんかもしていたり、車を見たら中に成田山のお守りがあったりと、何を信じているのか…と言われてもおかしくない。ノープロブレムで「いいじゃん」という感じなんです。全然矛盾を感じない。理性的には相矛盾するものをいっぱい抱えながらも、そこに矛盾を感じないという精神こそ和の精神なんですよ。大和心という日本人の根本精神。これを世界に広めていかなければならない。いわゆる日本の伝統文化が世界が目指す未来を握っているんだ。だからこそ日本人は、世界に平和を実現するためにも指導者にならないといけないし、個性の時代というお互いに違っていてもいいというものを教えていく指導者にもならないといけない。**

**これからあらゆるものが量から質へと転換していく、質の向上を目指すという時代に社会はなっていくんですけども、質の向上を目指すという面でも、日本人は指導者としての役割を果たさないといけない。それは日本人こそ、あらゆるものを世界最高品質の完成度に仕上げてしまう独特の力を持っている民族だ。日本民族が昔から培ってきた繊細な感性の力によって、あらゆるものを世界で最高の完成度に仕上げてしまう力を持っているんですよ。どんなものでも小さくしていく力は、日本人独特のものなんですね。繊細な感性があるがゆえにできる技術力なんですよ。そういう面でも日本人は、質の向上・素晴らしさを追求していくための指導者としても、日本人は活躍しなければならない。とにかくこれから新しい時代をつくっていくのは中国人で、完成させるのはインド人だ。だけども、中国の方々やインドの方々が、次の新しい時代をつくって完成させていくための目的・方向性・理念というものを教えるのは、日本人だ。これが過渡期を担う民族の使命なんですよ。新しい次の時代の目標を掲げる。目標をつくって渡していく。それが過渡期を担う民族の仕事なんですよ。どうしてもこれは日本人が成し遂げて、そして次の中国の方々に「頼むよ」と新しい時代を託す。そういう流れをつくっていかなければなりません。**

**本当にこれから200年は、日本の中でも激動ですよ。目まぐるしく激しく、より良い方向性へと変わっていく。大経済発展と日本民族最後の底力を発揮される、そういう素晴らしい文化がこれからつくられていく。そういう時代なんだ。だけど、それはそうなると言っても、我々がそうしようとしないとなりませんから、そういう理想を持って、これから大いに活躍しないといけません。このことをぜひ考えてみてもらいたいと思います。なかんずく、建築文化ということに関しては、日本人がアジアの未来をつくり出す。欧米を超える新しい建築文化をつくり出して、アジアに教えていかないといけません。企業的な意味でも指導者としての役割は非常に大きいということを考えて、現実への違和感を形にしながら新しいより良い未来の提案をどんどん全社員ができるような企業に、アサヒグローバルは成長してもらいたいと願っております。ありがとうございました。**